



足湯にくるぶしまでつかりながら、漁から帰ってくる船をぼんやり見つめる。今日は波が静かだ。

テトラポッドにあたって碎ける波音が、間抜けな話声に聞こえてくるのが可笑しい。思わずククッと声を洩らすと、海を見ながら会話していた観光客らしき老夫婦が、不思議そうな顔をして振り向き、わたしたちを見つめた。

「恥ずかしいやつだな」

隣に座る小太郎がわたしを肘で突いた。

「だって、波音が坊ちゃん？ 坊ちゃん？ って聞こえるんだもん」

また笑うと、小太郎は心底呆れた顔をして、湯から足をだしてタオルで拭き始めた。

数週間前の遠泳大会の時に、岩場に擦ってできた傷が、未だ治らない小太郎のために、温泉が擦り傷や切り傷に効果があるというので、まめに足湯に通っている。

小太郎は細身の体のせいか、指も細くて長い。タオルで足を拭く仕草もしなやかで、見とれるほどきれいだ。

「これ、おばさんに渡してよ」

幼馴染の小太郎は八百屋の次男坊で、よく売れ残りの果物（売れ残りという言葉を使うと小太郎がへそを曲げるのだが）を分けてくれる。

さっきから小太郎の周りがかすかに自己主張をしていた橘類系の香りに、そわそわしていたわたしは、すぐにビニールの縛り口を解き、覗き込んだ。

フロリダと書かれた金シールが付いたオレンジが三つ入っていた。

手に一つ取り上げると、海の塩とオレンジの香りが入り混じって、あたりにいちめん漂う。

「コタ、わたしオレンジ大好き」

と、小太郎にお礼がわりに言うと、

「知ってるよ」

とだけ答えて手を振り、反対方向の家路に向かって歩き出した。

わたしは、オレンジを鼻先に押し当てて、深呼吸しながらゆっくりとした足取りで帰宅する。

もうじき夏も終わる。蝉の声が日ごとに小さくなり、夜には虫が鳴き始めている。

わたしは残り少なくなった夏休みを、小太郎と、また、時に健ちゃんと待ち合わせて、この足湯で話をして過ごしている。

そして、そうできることが、とても幸せなことだと、ここ数カ月の痛みを乗り越えたわたしは、ちゃんと知っている。

天狗の鼻のような形をした半島の東端にあるこの小さな町は、漁業と観光業でまわっている。石を投げれば観光客か漁師か、知り合い、または知り合いの知り合いに当たる。

母はこの町の置屋で芸者さん達に三味線を教えている。普段は先生だが、人手が足りないときにはお座敷にあがり「芸者さん」になることもある。幼い頃は粋に着物を着こなし、きれいな化粧をした母がとても好きで、鏡越しの母が変身をする姿を飽きずにとずっと見ていた。

わたしにとっては、お座敷も、芸者さんも、おしろいも、三味線をはじく白いきれいな指も、すべて馴染みある大好きなものだったのに、一瞬にして大嫌いになってしまったのは、つまらない

放課後の出来事のせいだった。

夕陽の差し込む教室で珍しく男子と女子が入り混じって一冊の雑誌を見ていた。ページをめくるたびに嬌声上がる。その輪の中に、小太郎と健ちゃんの姿が見えたので、私はその輪の中に加わった。

「なに見てるの」

「リコちゃんも見る？　すごいよ」

「健ちゃんが、公園で拾ったんだ」

目の前にあったのは、生まれて初めて見るエロ本だった。開いたそのページは一面AVビデオの紹介コーナーだった。ビデオの写真の周りをイラストが飾り立てている。そのイラストになんともなく見覚えがあった。

神社に祭られている「金精様」にそっくりではないか。

裸の女の人がこんなに開脚している。裸の女の人がこんな格好をしている。こんな格好で笑っている。

わたしも将来こんなことをするようになるのだろうか。こんな風に笑うようになるのだろうか。驚きで目が逸らせない。見てはいけないものを見てしまったような、体中の毛がざわめき立つような感覚に襲われ、背筋が伸びると同時に、涙がこぼれてきてしまった。

「どうしたの、リコちゃん」

「リコ、お前大げさだよ」

「お前の母ちゃん、詳しいだろう。ご神体担ぐんだからさ」

金精様にそっくりなイラストを指さしながら、健ちゃんがせせら笑った。初めて見る意地の悪い目、眉、歪んだ口。

つられて笑いはやし立てるみんなの声が、耳に冷たく刺さる。

口を開けるけれど、言葉が喉の奥に詰まって出てこない。何も言い返せない。母を他人に小馬鹿にされたような悔しさに、強い怒りを感じながらも、反論することができない自分への苛立ちが胸を苦しくさせる。

小太郎が声を荒げた。

「お前らくだんねえよ、ホント、くだんねえよ」

「お前だって写真を見ただろ。そんで、笑っただろ」

「それと、リコの母ちゃんは関係ないだろが。お祭りで、ご神体担ぐのはこの本と関係ないだろ」

大きな声を聞きつけて、隣のクラスの新任教师が飛び込んできた。

真ん中に開かれた本を取り上げ、持ち主は誰かと静かに聞いた。

健ちゃんは恐る恐る手を挙げて

「拾ったんです。そこで拾ったんです」

と、今にも泣き出しそうな小さな声を出した。

「くだらない物を持ち込むな、校則違反だぞ。没収」

と健ちゃんの頭を小突いて、しばらくブツブツ言ってから、職員室へ戻っていった。

わたしは、叱られずによかったと安堵しながらも、あっけない結末に拍子抜けしてしまい、気付けば涙も止んでいた。

「お前がだげさに泣いたりするからこうなったんだぞ」

健ちゃんは捨て台詞と共に教室のドアを大きな音を立てて閉めると、さらに大きな足音を廊下に響かせながら帰っていった。

わたしは、ひとりでそっと教室を出て、校庭の隅にある藤棚に行き、ベンチに座って日が暮れるのを待った。

だれも見向きもしない藤棚だが、お気に入りの場所だ。棚に咲く花が、母の着物の模様と同じだからかもしれない。

きれいな花の下で、さっきの「金精様」のイラストのことを思い出すと、身震いがする。

町では毎年六月に「金精神社」の大祭が行われる。置屋の芸者や旅館、ホテルの女将達で構成された「女衆」が大きなご神体、そのご神体は黒く、大きな一本の木で作られた「ダンコン」を模った金精様なのだが、そのご神体を

「イイワ、イイワ」

「モット、モット」

という掛け声とともに担ぐというお祭りだった。多くの観光客がその女衆の周りに詰めかけ、神社までの道をゆっくり進む。私は金精様を、また摸された「ダンコン」がなんであるのか、知らなかったし、興味も無かった。

神輿そのものよりも、わたしにとってのお祭りとは、唯一、夜間の外出が許される自由な長い一日であり、お好み焼やあんず飴の食べ歩きを楽しむためのいくつかの屋台がすべてだった。

御神輿は屋台のおまけ、そういうものだった。

金精様の正体を知ったいま、ますます神輿は私の中では無用のものとなったのだった。

そして、その正体を知っていながら笑顔で声を張り上げ、神輿を担ぐ芸者さん達は、女衆は、そして母も、わたしの中では、いやらしい存在になってしまった。

昔からよく初対面の大人には、性別を間違われた。真っ黒に日焼けした細い体は、節々がゴツゴツしていたし、髪の手入れが好きではなかったわたしはいつでもショートカットで、まるで少年みたいな外見だった。そして行動もまた。

そんな自分も母と同じ女なのだ、と意識し始めたのは中学へ入学してからだ。

「エチケツト」と強制されてブラジャーをつけるようになり、胸の周りをムズムズさせて、セーラー服を着たわたしは、もう男の子と間違われることは無くなった。

昨日まで一緒になって真っ黒になるまで遊んでいた男の子が、まだサイズの合わないブレザーにネクタイ、ワンタックパンツの制服姿になってかしくまって教室にいた。その姿を見ていたら、彼らは一緒に夕方暗くなるまで一緒に遊びまわったのとは、別の人のように見えた。ことに、毎日一緒にいた小太郎や健ちゃんとは、会話を交わさなくなり、教室で一番遠い存在のように感じていた。

わたしと彼らはまるで、水と油のように、はじき合いながら教室で共存している別の生き物のようだった。

その水と油が久しぶりに交わったきっかけが健ちゃんの持参した雑誌だったというのは、皮肉なものだと、溜息が洩れた。

帰宅すると、ちゃぶ台に、夕飯の準備が済ませあった。それは、お座敷に上がるので帰りが遅くなるという合図なのだ。用意されていた冷めた海老フライをモソモソと口に入れながら、想像する。

母は、見ず知らずの男性の前で笑顔をみせて三味線を弾き、唄をうたう。時どきはお酌したりもするのだろうか、綺麗な着物も、化粧も、三味線をはじく長い白い指も、女を感じさせるものすべてが汚らわしく感じた。

健ちゃん言葉が蘇る。

「お前の母ちゃん、詳しいだろうが」

詳しいって何が、健ちゃんそれどういう意味。

チクチクするエビのシッポをガリガリと噛み砕きながら、涙をこらえた。

わたしは今年から、金輪際お祭りには行かない。神輿を担ぐ母を見たくない。

エロ本事件以降、クラスの中で男子と女子は、ますます交わりをもたなくなった。教室の真ん中に見えない線が張られているかのように、二分されている。

教室で交わされる誰かの話題が、お祭りに触れると、胸が痛む。

最近では母との会話も、少なくなった。目を真っ直ぐ見ることができない。母をいやらしいと見下している自分の心が卑しくて、やるせなかった。

毎日のように、芸者さんたちと楽しそうに母は祭りの打ち合わせに出掛ける。その後ろ姿を見送りながら想像してしまう。

母さんがご神体を担いで掛け声をかけている姿に、観光客がカメラを向ける。

「イイワ、イイワ」

音頭に合わせて団扇がはためく。あおがれる風は酒の匂いをも運ぶ。乱れた浴衣の裾から、細い白い足首が覗く。音頭のリズムに合わせて下駄が鳴り響く。カメラのフラッシュが、照明のように母たちを照らす。

子の心親知らず、という言葉が浮かんだ。

祭りの前日の放課後、下駄箱で小太郎と居合わせた。どちらともなく歩幅をそろえて歩く。

「この前、うちの八百屋でリコの母ちゃんに会ったよ」

「へえ、コタもたまには店の手伝いするんだ」

「リコの元気が無いし、祭りにも行かないって言うけど、何かあったのかなって、心配してた。行かないのか、祭り」

「うん。だって、見たくないし」

「屋台も出るぞ、好きだろ。健ちゃんの言ったことは気にすることない。思いつきでしゃべっちゃうんだ」

「気にしてないよ、別に」

本当は小太郎が、健ちゃんを諭してくれたのがうれしかった。

「くだんねえよ」

の言葉がありがたかった。でも素直にお礼を口にできない。

会話がなかなか進まなかった。母が、小太郎に、わたしのことを話していると思うと、無性に苛立ちを覚えた。

もっと何か別の話をしたいのに、言葉がうまく出てこない。

わざと時間を引き延ばしたくて、ゆっくりゆっくり遠回りになる海岸線沿いを歩いたけれど、十分で家に着いてしまった。

「お前金魚すくい、好きか」

ふいに聞かれた。

「うん、好き。出目金が好き。でもなかなかすくえない」

小さく右手を振って、小太郎と別れた。

祭りの当日、母は朝から忙しそうに動き回っている。一度だけ、母に祭りに出るのをやめて欲しいと申し出た。

「担ぎ手が減ってきて、大変なのよ」

たった一言でこの話は終わってしまった。何もする気にならず、畳の上にゴロリと横になり雑誌を見るでもなく、いたずらにページをめくっていた。

「リコちゃん、本当に来ないの。お母さん帰り遅くなるから」

「気にしないでいいよ」

母の顔も見ないで答えた。玄関の呼び鈴が鳴り、母が慌しく外に出て行く音が聞こえた。

お昼ごはんを済ませてから、わたしは近くにある温泉銭湯へ行くことにした。イライラしたときは、広い温泉、お風呂が一番いい。祭りで町全体が浮き足立っている、今日みたいな日なら空いているだろう。

予想は的中し、女湯は貸切状態だった。私は体を洗い髪を洗い、それから両足を広げてそっと覗き込んでみた。写真の女の人はもっと、広げていた。いつもより石鹸を多く付けて、強くゴシゴシと洗った。鏡に目をやると、私の胸が少し膨らんでいるのに気付く。心とは裏腹に成長しつつある自分の体が憎くなった。女になりたくない、男を意識したくない。私はあんなに股を広げるようなことはしない。絶対にしない。

浜辺に出てしばらく貝を探したり流木を拾ったりしてから駄菓子屋に寄る。アンコ玉と酢コンブを買った。駄菓子は、いつまでも、わたしを幼い頃のままに留めていてくれる風に思えて、安心する。

さっそく、あんこ玉を一粒口に放り込んで、ふと、気が付いた。幼い自分をとどめておくにはアズキとコンブは、ちょっとババ臭いし、なにより最近、味覚が変化してきている。

少し前までは、原色カラーのゼリーや、小銭の形をしたチョコレートばかり買っていた。

家に戻ると、玄関に小太郎からのメモが挟まれていた。

「おばさんに、エロ本の話をした。おまえは、金精さんを意識しすぎている。逆にエロいぞ。祭りに来い」

私はメモをぐしゃぐしゃにしてゴミ箱に投げ込みながら

「バカか」

と叫んだ。エロい？ 健ちゃんとは違う、そう否定する一方で、わたしはこの数週間、男とか女、体、そういうもので頭がいっぱいだったことを認めた。

小太郎に会って、メモについて文句を言おう。そう決めてしまうと、お祭りに足を運ぶ大義名分ができたためか、ほっとした。

意固地になって、母を困らせることに強い罪悪感があったのだ。

父の位牌に手を合わせて、小さくごめんなさい、と謝った。父は亡くなる前に、ベッドの上から、母を困らせてはいけないと、幼かったわたしに何度も言い聞かせた。

でも、父はずるい。

一番母を困らせたのは他ならぬ父本人ではないか。

もしも、今日、父が生きていれば、母は御神輿を担がないで、きっと父とわたしの三人は、手を繋いで屋台へ繰り出す。

まず、大好きな「あんず飴」の屋台に行って、テキ屋さんと「ジャンケン対決」をする。チョキを出したわたしは勝って、斜め後ろにいる両親にピースサインをしてから、二本貰う。そして父から食べすぎはダメだと諭されて、母に渋々一本渡す。

お線香の煙が目にしみた。ぽたぽた落ちた涙を袖で拭いてから、赤くなった眼に、目薬をさして外に出た。

長い、うんと長い糸電話が欲しい。

そうしたら雲の上にいる人と話ができるかもしれない。

「ねえ、いま、どこにいるの？」

小さく声に出しても返事はない。

周囲はもう薄暗く、夜がすぐそこにきていた。心地よい潮風に吹かれながら海岸線を屋台の裸電球の明りに向かって歩く。

あの放課後に雑誌と一緒に見ていたクラスメイトに会うと嫌なので、ゲゲゲの鬼太郎の頭に目玉のオヤジが付いたお面を買って被った。隣に売っていた水ヨーヨーも買って、右の中指にゴムを通して久しぶりのヨーヨーの感触を確かめた。

人波に小太郎を探す。鬼太郎は片目だから視界が狭い。やっと見つけた小太郎は金魚すくいの低い、平たい水槽の前にいた。

右手に斜め四十五度の角度で和紙のホイを構え、微動だにしない。声を掛けにくい真剣な様子だったので、少し離れたところから盗み見する。小太郎は、一向に動かない。そこだけ時間が止まったようになっていた。

「もう三回失敗してんだからよお、簡単なの狙いな。その、ほら赤い小さいのを浮いてきた瞬間を狙うんだよ。出目金は重いから、軽いのにしなっ」
少し苛立った屋台のおじさんの大きな声が私の耳に届いた。
出目金、いつかの帰り道の会話が蘇る。

「出目金が好き」

確か、そう言ったはずだった。

結局コタの気合は空振りに終わり一匹の金魚もすくえなかった。私はそーっと後ろに回り、背中にヨーヨーをぶつけた。

「おっ、来たな。エロ女」

振り返りもせずに小太郎が言った。

「エロじゃないよ、ばか」

もう一度ヨーヨーをぶつける。そろそろお宮にご神体が戻ってくる時刻だった。わたしはお面をつけたまま小太郎と並んで歩いた。

「おばさん、笑ってた。なんだそんな事だったのって。俺も笑っちゃったよ。だってみんな考えすぎだよ。あの本にあったようなことは、俺達には起こらない、まだまだ先の話だよ」

「でもさ、コタもいつかするの。そういう風にしたいと思うの」

「分かんないけど、好きな人が出来ればそうなるのかもね」

「ふーん、そうか」

「そんなことより、恥ずかしいからさ、お面、外せよ」

返事を待たずに小太郎の手がわたしの髪に、頬にそっと触れた。お面を外されたわたしの顔は火照っていたのだろうか、風が冷たく心地よかった。

小太郎は一瞬合った目をそらすと、乱暴にお面を自分の頭に乘せて、たこ焼きを買いに行ってしまった。

お宮さんの賽銭箱の前の小さな石段に並んで座った。たこ焼きを半分こしながら、黒い大きな金精様の到着を待つ。

風によって、女衆の声が聞こえてきた。

わたしと小太郎は顔を見合わせて笑った。

海上花火大会の打ち上げの音が、重く、強く下腹部に響いて、体がふるえた。

お祭りの後の数日は、体中がだるく、微熱を帯びたようだった。母は、嫌がっていたお祭りに来たから、知恵熱でもだしたのではないかと少し愉快そうにわたしをからかった。そして、そんなダルいわたしをいたわる風ではなく、むしろ逆に嫌がらせのように、嫌いな干物が毎日食卓に上がるようになった。

今日は金目鯛、昨日はアジ。明日はなんだろうと思うと、夕飯の時間が憂鬱になる。朝ごはんは毎食パンなのが救いだ。

「なんで、毎日干物なのよ」

「体にいいし、おいしいから。それにあなた最近太ったわよ。肉より魚を食べなさい」

「だったらお刺身に方がいいな」

我が家では、食事の献立に文句を言うのは禁止されている。

もうすぐ夏休みになろうとしている。放課後のプールでは小太郎がクロールをしている姿が水しぶきの中に見え隠れしていた。

練習熱心だが、もともと華奢な体の小太郎は、筋肉がつきにくい様子で、タイムがなかなか伸びないのを悩んでいるようだった。

健ちゃんにはかなわないらしく、一年生なのに水泳大会が行われると健ちゃんは選手に選ばれているのだと、少し悔しそうに教えてくれた。

お祭り以来、小太郎とは、自然に会話をするようになっていた。

しかし、健ちゃんとは、一切、口を利いていない。ここ数カ月で急に背が伸びて大きくなった健ちゃんは、密かに女の子たちから人気らしい。

廊下で女の子から手紙を渡されたりしている姿を何度か見かけた。

「どこが良いんだか」

と、憎まれ口をたたくけれど、本当は自分でもわかっている。

大きな体も、低い落ち着いた声も、不思議と安心感を与えてくれる。少し大人っぽい雰囲気を持ったところが人気の理由なのだろう。

その低い声と、会話を交わさないまま、夏休みに入るのは、ちょっと寂しい気持ちもしているのだが、わたしから声をかけるのもはばかれる。

教室のベランダからは、太陽の光を乱反射している海が見える。その海の青を見ながら、黒板消しをはたいていると、小太郎が隣にやってきた。

「なあ。健ちゃんさ、最近部活に顔出さないんだ」

「さぼってるだけでしょ」

「いや、真面目な奴だからな。それに放課後なんて一目散で家に帰るんだ。なんか用事かって聞いたんだけど、首振って何でもないから、って」

「じゃ、ほっとけばいいじゃない」

「リコは冷たいな。幼馴染じゃないか。ちょっとは心配しろよ」

わたしは、返事の代わりにワザと小太郎の顔に向けてチョークの粉を叩いた。

最近、健ちゃんが、授業中に教科書で顔を隠して眠っていることは知っている。部活をさぼっていることも、毎日のようにプールを眺めているので気づいていた。

「わかったよ。機会があったら、聞いてみる」

小太郎は、髪に付いたチョークを払いながら、頼んだぞ、と真面目な声を出してから、教室を出て行った。

暫くベランダから外を眺めていると、ジャージに着替えた小太郎がプールへの道を走っていくのが小さく見えた。じっと見ていたら、気配に気づいたのか、不意にベランダを見上げてきたので、思わず慌ててしゃがみ込み、隠れた。

どうして隠れたのか、自分でもわからない。

翌朝、いつもより早い時間に家を出て健ちゃんの家へ立ち寄ってみた。

健ちゃんのお父さんは漁師をしていて、お母さんは釣った魚を干物にしたり、すり身に加工したりして販売している。

ホテルや旅館にも卸していてなかなか有名なお店だ。

「やまか」と屋号をそのまま店の名前にした看板の脇から声をかけながら裏庭に入る。昔から何度となく出入りした家なのに、緊張してしまう。

「おはようございます。健ちゃんいますか」

ガタガタと音のする裏庭を覗くと、健ちゃんが魚を捌き、干物を天日干しにしていた。

「なんだよ、お前」

「部活に来ないって、コタが心配していたからさ」

「見ての通り、忙しいからだよ。心配するなって言っとけよ」

ぶっきらぼうにそれだけ言うと、健ちゃんは邪魔だと言いながら、猫を払うように私を追い払った。

やっぱり、話しかけなればよかった。

わざわざ遠回りしてまで、様子を見に来たのに。

わたしは朝の出来事を、そのまま小太郎に伝えて、腹いせに軽くまわし蹴りをした。

軒に掛けられた風鈴が、風に煽られていい音をさせている。波の音と合唱しているようで、心地いい。ゴロゴロしていると、新しい、い草の香りが鼻からも夏を運んでくれる。その香りの中でぼんやりと、わたしと母の遠い未来のことを考えていたら、胸がシワシワと小さく枯れてしまった。この家が傾きそうに古くなっている。白髪の増えた母の隣で、なぜかわたしは途方にくれていた。身震いして時計を見ると、もう夜十時をまわっていた。

玄関チャイムが鳴った。玄関先から母の驚く声が聞こえたので慌ててわたしも部屋を飛び出した。

母は、訪ねてきたらしい健ちゃんの肩を優しく抱いて室内へと誘っている。

「どうしたの？ こんな時間に」

健ちゃんは口を真一文字にして、首を振っている。

「リコは、部屋にいなさい」

母の強い言葉に思わずたじろいだ。でも、こんな時間に自分の母を訪ねて同級生が来たというのに黙って引き下がるのだろうか。

「でもお」

「母ちゃんが、入院するんだ。俺のせいだよ」

健ちゃんが声を絞り出した。母は黙って麦茶を健ちゃんの前に置いてから、突っ立っているわたしを少し睨み、

「座りなさい。でも、聞いたことは誰にも話しちゃ駄目よ」

と釘をさした。

わたしは、黙って二回頷いてから部屋の端に正座した。

「どうして、入院するの？」

「よくわかんないけど、中毒だとか。俺がここ最近、干物の手伝いを嫌がったんだ。部活に出たいからって。無理したらそしたら...父ちゃんが病院に連れて行ったんだ」

中毒。なんだか分らないけれど、大変な事態になっているのではないか。軽い気持ちで話に耳を傾けていたけれど、健ちゃんに泣くほど大変なことが、いや、おばさんにとって大変なことが起っているらしいことは、理解できた。

「健ちゃん。歳をとってからの妊娠には注意が必要だけれど、お店の手伝いを放棄しただけで中毒症にはならないのよ。だから、大丈夫。お母さんは強いじゃないの」

健ちゃん目から涙が溢れて止まらない。おばさん妊娠していたの？ 噂の早いこの町でそんな話は聞いたことが無かったし、どうして母が知っているのかが不思議でもあった。

「健ちゃんに兄弟ができるの？」

我ながら場に相応しくない暢気な質問をしてしまったと、後悔したが口が勝手に動いてしまった。健ちゃんは目を腕で三回ほど擦ってから、言った。

「ああ、弟か妹かまだわかんねえけど。なんとか中毒だし」

「大丈夫よ、きっと。明日おばさんも病院に行くから。もう隠せないわね。それに、もともと隠すことじゃなかったのよ。おめでたいことなんだからね」

「母ちゃん、俺が恥かしがったから。この歳になって妊娠なんて、恥かしくて人に言えないって怒鳴っちゃったんだ。だから、母ちゃんは隠せるだけ隠そうとして。俺が馬鹿だったんだ」
麦茶を一気に飲み干して、

「夜分すみませんでした。おばさんにしか話せなくて。明日は父ちゃんが見舞いに行くから、俺が干物を作ろうと思う。本当にすみませんでした」

と言うと、靴をさっさと履いて一礼した。

その姿に、母が、不思議そうに聞いた。

「ね、どうしてわたしがお母さんの妊娠を知ってることに気づいたの」

質問に驚いたようすで眉を上げて

「店の片づけを手伝っていたら、おばさんと母ちゃんが、話をしているのが聞こえてきたんだ」と、笑ってから

「おばさんの声は、よく通るし、大きいからね。お祭りでも一番大きな声だったよ」

とおどけたように続けて、肩をすくめながら、小さくわたしに「じゃあ」と目配せをすると、海の音のする港方面へ一目散に走って消えていってしまった。

暗闇に消える背中を目で追いながら

「いい男になりそうだねえ」

と母は満足そうに呟いた。

「リコちゃん、明日暇でしょ？ 健ちゃんの家に行って、干物を作るの手伝ってきてちょうだい。一人じゃ大変なのよ。ホテルや旅館に卸す量を作るだけで手一杯なんだからね。いいわね」
大変そうなことは理解できたので、手伝いを断ろうという気持ちは芽生えなかったが、エロ本事

件については何も解決していないことを思い出すと、モヤモヤした不満が残った。

あの時、健ちゃんはわたしの母を馬鹿にした。それなのに母を頼るなんて、どうかしている。

干物日和という言葉があるかどうかは知らないが、海から気持ちいい潮風が吹きつけて、照りつく太陽が今日一日快晴であることを約束してくれている。動きやすいように、短パンとゆったりとしたTシャツを着て、健ちゃんの家への道を歩いた。幼い頃は、いや中学に入学するまでは毎日のように行き来した十五分の道のり。あのときよりも歩くのも、走るのも早くなっているはずなのに、遠く長く感じるのは暑さのせいだろうか。

玄関脇の細い通路を抜けると、海に面した作業場がある。ごめんくださいね、と小声で呟いてすり抜けてゆく。捌いたイカやアジが青いネットの上で日に照らされている。大きさといい、光の反射の派手さといい…。

「大漁旗みたいだね」

作業に熱中している健ちゃんの背中に声をかけた。はじかれたように振り向いた顔が、あまりに不細工で笑ってしまった。

「いいよ、俺、一人で大丈夫だから」

わたしは返事をしないで干物をひっくり返した。昔からおばさんが作っている姿を毎日のように見てきた。

「おばさんのところに、行ってきなよ。店番しているからさ。大丈夫ネコババなんてしないから。ほらほら」

本当は憎まれ口の一つでも叩いてやるつもりだった。しかし、寂しそうな背中を見たときに、おばさんが元気になってからにしようと思った。この状態で言い争ったらフェアじゃない。

通りに面した小売店の入口のブザーが鳴った。お客さんだ。

「ほら、もう邪魔だから、早く行きなよ。お母さんも行くって言ってたから、一緒に帰ってきてよ」

健ちゃんの背中を両手でグイグイと押した。わたしよりうんと広くて、筋肉のついた体に少し戸惑った。耳の裏が熱くなってしまって、恥かしいのでわざと大きな声で「はい、お待ちください」と返事をしてから店へ小走りした。

商品がすべて売れて空になったガラスケースの向こう側が、夕日でオレンジ色に変わっていた。魚のおいと海の塩の染み付いた古い木造の家の柱は、大きな鍋で煮たら、いいダシが取れそうだなと想像して、ひとり、含み笑いをしてしまった。そのままゴロンと横になり湾曲したガラス越しに外を見ると、歪んだ小太郎姿が見えた。あっと思った瞬間、上から大きなげんこつが頭にふんわり落ちてきた。

「リコ、何してんの？ 一人でニヤニヤして、気持ち悪いよ。健ちゃんは？」

手でげんこつを払いのけてから

「店番を頼まれたの。今日はもう売り切れました。また明日ご来店ください」

わざと澄ましてそう言うと、小太郎は引きつり笑いをしながら、手を振って外に出て行ってしまった。

再び寂しくなった店内には、セミの鳴き声だけが響いていた。わたしは海側に周り、風に当たることにした。今日一日何も食べていない。おなかですいていることに気付くと同時に、不安が胸を締め付けてくる。

みんな帰りが遅い。おばさんになにかあったらどうか。

あの夜の健ちゃんの泣き顔と、母の大丈夫という声が波の音にあわせて順番に寄せては返す。

「おい。コーラか、サイダーどっちがいい？」

背後からの声に驚き振り向くと小太郎が笑っている。その笑顔は優しくて、いつでも私を安心させてくれる。

「サイダー、お願いします」

くぐもった声で涙を悟られないように、ぶっきらぼうに答えてから、ひったくるようにしてサイダーを小太郎の手からもぎ取った。

「おお、こわい、こわい。猿女だな。もっと感謝して受け取れよ」

わたしは聞こえないふりをして、一気にサイダーを飲んだ。はじける泡が目に入って、滲みた。

「久しぶりだな。ここで海を見るのも、リコといるのも」

「昔はいつも健ちゃん家で集合してから海に飛び出したもんね。でもあれからそんなに時間は経っていないのに」

海から吹いてくる風が少し冷たくなってきた。小太郎とわたしは黙ったままジュースを飲んで、波の音を聞いていた。

防犯灯に明かりが灯るころ、母と健ちゃん、おじさんの三人が大きなスイカを持って帰ってきた。

「リコちゃん。お土産だよ。一日ありがとう」

そう言って、おじさんはスイカをポワンポワンと真っ黒に日焼けした大きな手で叩いた。

「あれ？ コタもいたのか？」

健ちゃんが素っ頓狂な声を上げた。

「お前が、気になって様子を見に来たら、リコが店番してるから。さっき来たんだ」

「スイカ食べていけよ。そうだ。スイカ割りしようぜ。たしか、木刀があるから、探してくるよ」

そう言い残すと健ちゃんは大慌てで二階へあがって行ってしまった。

おじさんと健ちゃんの元気そうな声を聞いて安心した。恐らくおばさんは心配いらないのだろう。そんなわたしの心配に気付いてか、母がおばさんの状態を教えてくれた。無理をせずに程よい運動をしながら安静にすればいいのだが、今は血圧が高いのでしばらく病院にいることになったらしい。

「おじさん、わたし健ちゃんがお見舞いに行きたいときには、いつでも店番してあげるよ。今日だって全部売ったんだから」

「ありがたいね。健二よりもリコちゃんのような可愛い子が看板娘になっていたほうが、商売繁盛ってもんだな」

コタは、話題についていけないようで、ただニヤニヤ笑いながら、

「俺も、店番やってみたいな」

とだけ言った。

コタと健ちゃんが力任せに叩いて割ったスイカは、グチャグチャで、食べにくかったけれど、甘くて美味しかった。

昔、父と一緒にスイカを食べたことがあった。そのときに父が教えてくれた。

「海を向いて食べてごらん。潮風がスイカにちょうどいい塩気を足してくれてね、もっと甘く感じるよ」

それからいつでもわたしは、スイカは海のほうを向いて食べることにしている。あまり記憶に残っていない父だが、このセリフを思い出すと、穏やかな優しい人だったなあと思う。

母もスイカを食べる時は、いつでも海のほうを向いていることを、わたしは知っているし、そんな母を見ていると、少し胸が苦しくなってしまう。

健ちゃんのお母さんは、子供を生むという。そんなお婆さんと年の変わらない母は、いつまでもわたしと二人で、あの小さな家で暮らすのだろうか。い草の香りの記憶が蘇る。

母の再婚という言葉が脳裏に浮かんだが、反射的に打ち消すように頭をブンブン振ってしまった。

。

「リコ、あの時は、ごめん、な」

健ちゃんが、途切れ途切れに言った。あの放課後のことだと、すぐに理解できたが、返事に困り、黙ってしまった。

「お婆さんに、失礼だったし。リコにも嫌な思いをさせて。俺も母ちゃんが妊娠したなんていうから、不貞腐れていたときだったんだ。本当にごめん」

健ちゃんのことを聞きながら、もう怒っていない自分に気づいた。同時に不思議に思っていたことを思わず口にした。

「どうして、イライラの原因の雑誌を、捨てずに教室に持ち込んだの。みんなに見せたの」

怒ってはいないはずなのに、思いのほか語尾が強く、声が高くなってしまい、責めているようで、小太郎は驚いた顔をしてわたしを見た。

健ちゃんは、下くちびるを二回ほど、ギュッと噛んでから

「よく分からないんだ」

と、小声で答えた。

「ただ、俺だけが汚らわしいと感じたのか、それともみんなそうなのか。知りたかったんだ。みんながどう感じるのかを、知りたかったんだよ」

最後は独り言のように呟いていた。

コタは、会話が聞こえているだろうに、聞こえないふりをしながら、新しいスイカに手を伸ばしている。

「いいよ。わたしも泣いたりして大げさだったから。でも、どうして兄弟ができるのに、素直にうれしがらないの」

「ちょうど、エロ本を拾ったすぐあとに、聞いたんだよ。タイミングが悪いって言うか。自分の親は違うって思ったんだ。拾わなければよかったんだ」

「なー、おい。お前ら来週の遠泳に参加するだろ？」

小太郎が大きな声で割り込んできた。

もう、その話はおしまい。

そういう合図だ。わたしも健ちゃんが戸惑ったことはもう十分、わかっている。それなのに、これ以上しゃべらせるのは意地悪だ。

「遠泳？ って何だっけ」

そんなイベントあったのだろうか。全く頭になかった。

「お前、先生の話、何も聞いてないのか？ 来週、海を二キロ泳ぐんだ。途中で棄権する場合は、ゴムボートで拾ってもらえるから安心だぞ。参加賞はカップラーメンだ」

「おお、海で食うとうまいんだよなあ。参加しようかな」

健ちゃんのお父さんが口を挟んできた。

「その頃には、あいつも退院しているだろうよ。一緒に見に行行ってやるよ」

母は、スイカの皮を片づけながら、

「そろそろ、おいとましましょう」

と、小太郎とわたしに声を掛けた。

三人で並んで歩く影が、月明かりに照らされて道路に長く伸びている。

「リコは体力ないんだから、遠泳に参加しないさい。強制です」

参加したくないので、返事をしないでいると、近所の旅館のお座敷からかすかに、三味線の音が聞こえてきた。その三味線のリズムでわたし達は自然と歩調をそろえた。三叉路で小太郎と

「おやすみ、また明日」

と短く挨拶して別れた。

「小太郎も、いい男になりそうねえ。リコはどっちがタイプ？」

「バカみたい。どっちも嫌だね」

そういいながら、二人の背中を思い浮かべた自分が恥ずかしくなった。

バッカみたい。

今度は自分に言い聞かせてから深呼吸をした。

「ねえ、どうしてお母さんは、おばさんの妊娠を知ってたの」

「ふふ、長い付き合いだからね。お魚を買いに行ったときに、気付いたのよ」

母に金精様を担ぐのを止めて欲しいと頼んだ時に、軽くあしらわれたのは、おばさんの妊娠が分かっていたからだったのだろう。健ちゃんが不安の中にいたからこそ、不潔なものではなく、祀ることが、自然なこととして伝えたかったのではないかと思った。

あの一か月前の母への八つ当たりを思い出すと、とても悪いことをしていた気になってしまう。

「ねえ、リコ。久しぶりに銭湯に行かない」

「これから？ どうしようかな。スイカの食べ過ぎでお腹が張ってんだよね」

「張っているの？ 痛くはないのね。じゃ、たまにはいいじゃないの」

「それじゃあ、ね。帰りに駄菓子買ってくれるなら、いいよ」

太るわよ、笑って言う母の声が、わたしの耳に心地よく届いた。

遠泳大会を二日後に控えた日の明け方、お腹が痛くて目が覚めた。

クラスメイトの間では聞く事があったが、まさか自分にもこんなに突然訪れるなんて、と頭が真っ白になってしまった。

初潮がきたのだ。

まだ眠っている母を揺り起こして、半分泣きそうになりながら、自分の動揺を伝えた。母は、いつの間にか用意してくれていたピンク色のポーチを渡してくれた。

中には、下着とナプキンが入っていて、学校の教育ビデオで見たものとそっくり同じなので驚いてしまった。初めて使うそれらの道具は、わたしの体と全く馴染まずに、違和感だけをはっきりと肌に伝えて存在感を主張していた。

その日の夕飯は、くちなしで金色に炊いたご飯と、わたしの好きなハンバーグ。嬉しくも、おめでたくないのに、と文句を言ったら、ただ笑って

「私とお父さんがうれしいのよ」

と笑顔で答えてきたので、急に恥ずかしくなり、わたしは聞こえないふりをして、ご飯を口一杯にほおぼった。

大会当日は、天候、気温、波の大きさといい、まさしく遠泳日和だった。

学校の先生や自治会の人たちは準備で追われて忙しそうに、首に巻いたタオルで流れる汗を拭きながら、カップラーメンとペットボトルのお茶を用意して、テントを張っている。

生理で海に入れないうわたしは、空いているパイプイスを、応援に来ていた健ちゃんのお母さんの隣に運んで、座った。

「おばさん。おなか少し出てきているね」

おばさんは、笑いながらわたしの手をとって、そっとその丸いおなかに添えながら、言った。

「女の子がいいのよ。リコちゃんみたいに生意気な女の子がいいわ」

「生意気は、余計だよ。でも、健ちゃんはきっといいお兄さんになるね」

そう言うと、嬉しそうに頷いた。少し離れたところにクラスメイトが固まっているのが見える

。

賑やかな輪の中でひとときわ体の大きな健ちゃんは目立っていた。時折、おばさんの方を向いては笑顔を見せる。おばさんは、その笑顔に小さく手を振って応えている。

小太郎はひとり、こちらへやってきて、おばさんに挨拶したあとに、わたしの目を見つめ、しっかりと合わせて

「今日の遠泳は、負けたくないんだ」

と、いつもより低い声で言った。

どう返事をしたらいいのか分らないわたしは、ただ黙って頷いた。

校長先生の挨拶に続き、自治会長の長話、そして体育教師からの注意事項と、ホイッスル。

「位置について」

位置ってどこだよ、という声が広い砂浜で笑いを誘っていたが、健ちゃんと小太郎は真剣なまな

ざしで海を見ている。

空砲が大きな音をたてると弾かれたように、二人は砂を蹴って波の中へ消えていった。